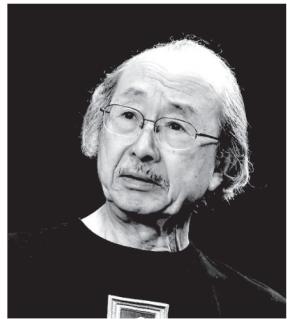


# 閑話休題

## 回顧：海を渡って“半世紀前の NY 赴任”④



西山慈恩\*

前回は感謝祭の日に現地の日系人家庭に招待されたときのエピソードで終えた。

今回は、それからの約半年間のことになる。

5月の着任から7か月が過ぎ、青森と同緯度であるNYは厳しい冬になっていた。

現地の温度表記は華氏(F)で、我ら日本人がなじんでいるものは摂氏(C)で、華氏の32度が摂氏の0度で、摂氏の1度は華氏の1.8度だから、街に表示されている温度を摂氏に換算するには、華氏表示の数字から32を控除したものを更に1.8で割るという作業をすることになる。PANAMビルの42階にあった会社の部屋から北西の方向にRockefeller Center一帯のビルが眺められたが、その中のビルの一つのてっぺんあたりに大きく気温表記をしているものがあった。12時前にそれを見て、「36度かじやあ2度だな、コートなしでも行けるか」と語らいながら昼食に出かけたことを思い出す。今の東京で2度なら正に極寒だが、氷点下以下が普通の冬のNYでは慣れて来ると2度位ならレストランでコートを脱ぐというのが面倒だったのである。

昼食で思い出すのは、マッカンと呼んでいたレ

ストラン。Lexington Ave の45丁目の角にあったかと記憶する。1階がBarで、地下がRestaurantになっていた。階段を下りると、閑取のような体格のウエイトレスがメニューを手にして席に案内してくれた。

イタリアンレストランだからスパゲッティにすることもあったが、日本のそれに比べると米国では大抵ゆで過ぎで、歯ごたえが悪く今一つであったから、ビールカツレツ・パルミジャーナを注文することが多かった。注文するとウエイトレスがすかさず聞いてきた。“White or Rye?”さらに続けて“Toast or not?”付いてくるパンの指定である。当時の日本ではそんなことを聞くRestaurantは無かったから面食らったものだ。で、新しく着任てきて、英語での会話に問題はないと豪語した仲間をそこに誘い、先に注文させ、戸惑っているのを皆で眺めて楽しんだのが懐かしい。

感謝祭が終わると、街は一気にクリスマスに向かって動き出し、ビルの外壁やショウウインドウの電飾のテーマがクリスマス一色となった。

Rockefeller Centerに飾られた巨大なクリスマツリーは自然木で、どこで伐採され運ばれて来たかが、毎年話題になった。クリスマツリーの前は一段掘り下げられた広場となっていて、そ

\* 丸紅株式会社（定年退職） J.Nishiyama 連絡先 E-Mail アドレス : jion13381008nishiyama@gmail.com

れを囲むようにカフェがあった。その広場は冬になるとスケートリンクになり、スケートを始めたばかりのような子供たちでぎわっていた。その広場から東に延びる小道は五番街にぶつかり、その五番街を隔てた反対側には Sacks Fifth Ave という高級デパートメントがあり、その大きなウィンドウの電飾は毎年評判を呼んでいた。クリスマスツリーとこのウィンドウ電飾とに挟まれた形となる小道には数体の天使の像が下からの投影で浮き上がるよう飾られていた。

クリスマスに向けての動きは、飾りだけではなかった。街中にクリスマスソングが流れていた。グランドセントラル・ステーションの真上に建つ PANAM ビルは事務所に向かうにはステーションの改札口前の広いホールからエスカレーターで一階上がったところにあるエレベーターを使う構造になっていて、その階にはエレベーターの乗り場とは別にかなりのスペースがあった。そのスペースで昼食時の休憩時間や勤務終了後の数時間、そろいの衣装を付けたコーラスグループがクリスマスソングを演奏していた。昼食を済ませオフィスに帰る前にしばし立ち止まり聞いたものである。Silent Night や O Holy Night は日本でも耳にしていたが The First Noel はクリスチヤンでない私には日本では耳にしなかった曲であった。

更にそんなコーラス隊とは別に、グランドセントラル・ステーションの改札口前の大ホールにはクリスマスにかかる音楽が常に流れていた。その中でも、パ・ラパパンパンと歌詞が繰り返されリズム感のあった The Little Drummer Boy<sup>※1</sup> は今でも耳の底の記憶にある。それを聞きながらホールを横切り、脇の階段から地下鉄ホームに降り地下鉄で 30 分位の下宿に帰るのだが、帰った部屋には誰もいないから、耳に残るクリスマスソングが日本に残してきた家内を思う気持ちを膨らませたものだ。いまならスマホで顔を見ながら話せるが、当時電話で話すには、国際電話を申し込み、かなり待ったうえでやっと、可能となるものであつたし、何よりもその料金がべら棒に高かったから、「では顔を見ながら電話するか」というわけにはいかなかつた。

※1 1941 年に米国の作曲家 Katherine Kennicott Davis が発表したクリスマスソング

米国ではクリスマス・ホリデイが年末の大行事

であり、子供たち家族へのプレゼントを買う 5 番街の 58 丁目にある玩具の専門店 F. A. O. Schwarz のにぎわいが、その年にぎわいの指標として TV で報じられていた。

年末年始は大みそかの Times Square でのカウントダウン以外は静かなもので、社会は 2 日から平常にもどるが、勤務先が米国法人となっていても、日本の会社の子会社であることから、駐在員にとって新年の仕事始めは日本に合わせて 4 日からであったから、年末からの約一週間の休日は極寒の中で過ごすことになる。そんなことから、駐在員は南部の方に旅行に出かける家族も居たが、スキー旅行に出かける家族が多かった。

直接の上司には子供がなくて夫婦二人であったこともあり、ニューハンプシャー州のスキー・リゾートへの合流を誘われた。合流といっても、最初から夫婦の車に便乗してというので、スキーそのものが初めてという身にとってはなんとも有り難いもので、今思えば、片道休憩も入れれば約 7 時間の車の旅に他人を載せてと、なんとも面倒見の良い上司であった。

ブーツやスキー板を現地で借りて初めてゲレンデに立った時、22 年前までは敵国としてその地の言葉を使うことを禁じられていた国のスキー・リゾートに居ることになんともいえぬ感慨をもつたものだ。



広いゲレンデを一人占め

そのスキー場での思い出は、透き通るような青空の下、白銀に覆われた山々に囲まれた広いゲレンデに色とりどりで点在したスキーヤーの眺めの美しかったことが、まず浮かぶが、体の記憶にゲレンデの端に設置されていた T-bar と呼んでいた設備利用での失敗がある。これは T の字を逆さにしたようなものを、一人で乗るリフトの代わりにしたもので、リフトのように腰かけて乗るのではなく股で挟んで腰に当て、体重はスキー板をついたまま雪面にかけ、その T-bar がつけられているロープが巻き上げられることでゲレンデを滑走して昇って行くというものであったのだが、初めて使った時に、その T-bar を挟むものの、リフトのように腰を下ろしてしまい、体重がかかったことからロープがたるみ転倒し笑われたものだ。スキー板の下の雪面は利用によって道筋が出来上がっていたが、思えば初心者がスキー板を足になじませるのに適した設備であったかもしれない。

パレード好きの米国では、色々な記念日にそれが開催される。楽隊を先頭に各種の団体が制服姿で整列して楽隊の奏でる行進曲に合わせて大道りを行進するもので、マンハッタンでは 5 番街を北から南に行進するのだが、アイルランドの祝日に当たる 3 月 17 日に開催される、セント・パトリック (St. Patrick)・デー パレードは、アイルランドにちなんで制服のどこかに緑色のものが飾られ、春の始まりを祝うようで、気持ちが高揚したものだ。5 番街の St. Patrick Cathedral 前では行進とは別に、派手な緑色の帽子等で着飾った人々が行き交いショットしたファッションショーであった。

春の近づきを感じ始めた 4 月 4 日 (1968 年) 公民権運動家のキング牧師がテネシー州メンフィスで暗殺された。メンフィスと NY の間には 1,800 km もの隔たりがあるが、NY の会社内でも緊張が走り、暴動の発生を懸念してその日は明るい内にということで早い帰宅が指示された。オフィスの窓からハドソン川を隔てるニュージャージーの下町のあたりで煙らしきものが上がっているのが見える等の声も聞こえたが、結果として NY では懸念するようなことは起こらなかったと記憶している。改めて米国における人種間の緊張を思い知った次第であった。

キング牧師と言えば、1963 年 8 月 28 日のワシントン大行進でリンカーンの像を背後にして行った演説の中の “I have a dream” という phrase が有名だが、その部分の全文を読めば、公民権運動にささげた彼の人生と共に今でも感動する。下記はその一部。

I have a dream that one day on the red hills of Georgia, the sons of former slaves and sons of former slave owners will be able to sit down together at the table of brotherhood

更に、暗殺される前日に行った演説は、まるでそれを予告したような内容を含んでいて、胸を打たれる。

I may not get there with you.  
But I want you to know tonight, that we, as  
a people,  
will get to the Promised Land.  
And so I'm happy tonight.  
I'm not worried about anything.  
I'm not fearing any man.  
My eyes have seen the glory of the coming  
of the Lord.

結婚したのは東京オリンピックが開催された年の 11 月であったから、NY に赴任した 1967 年の春は結婚後まだ丸 3 年が経っていなかった。家族を赴任地に呼び寄せるのは、当時は赴任後 1 年を経てからとなっていた。不慣れな外国での生活を考慮して、現地に社員が慣れてからでないと仕事に支障が生じからとの判断であったようだが、経費節約をも狙ってなかったかともおもわれた。当人たちにとっては、新婚の時を引き裂かれたものであつたのだが。

赴任からの 1 年が近づき、家族の呼び寄せが近づいたので、アパート探しを始めた。

当時の NY では、地下鉄での通勤で便の良い Queens 区の Flushing 地域のアパートに駐在員家族は多く住んでいたから、そこらで探した。

これも赴任時に部屋を探した時と同じように NY Times の広告を利用した。違っていたのは、車を持ち運転していたから、地下鉄駅近くでなくても良かったことだ。部屋を借りるのとは違つてアパートとなると照会先は個人でなく Renting

Office で、交渉は事務的であったから、ある意味気楽な照会となつた。

Fresh Meadows<sup>※2</sup> という、かつて Golf Course であったところを開発したという、大きな Housing Complex 内の物件を見付けた。



現在の Fresh Meadows 航空写真 (Google Map より)

これは広い敷地に one floor に 7 戸のある 3 階建てのビルや Duplex (1, 2 階を 1 戸で使用する形のもの) が木立と芝生に囲まれて点在していて、中央には Oak Grove と呼ばれていた森林公园もあり、地下鉄の終点からは徒歩圏ではないということ以外は申し分なかった。

物件に案内してもらい、日当たりの具合を知るために方角を聞いたたら、意外な反応があったのが記憶に残っている。「開口部は南に向いてないから良いではないか」という返事。おおむね日本人は南向きの日当たりの良い住居を好み、自分も例外でなくそうであるが、暖房設備の完備した NY の住居では、日当たりによる暖房は考慮外で、む



現在の Fresh Meadows の様子 (Google Map より)

しろ家具に直接日光が当たることでの損傷を配慮することが多いということが分かった。

※2 Fresh Meadows は 1920 ~ 30 年代は Golf Course であった。30 年代には PGA Championship や US Open も開催されていたが、1946 年に NY Life Insurance Co. が買収して当時としては米国でも話題となった Housing complex として開発したもの。

Owner は変わったようだが、現在もおおむね当時と変わらない状況で維持されていると判断できる。

5 月中旬、家内の来米が実現した。

迎えに行った際、まごつかぬ様に、事前に空港までのドライブをしておくことを先輩駐在員から、冷やかし半分で勧められていた。“そんなこと！”と思っていたが、念のためにとそれを実行してみて、冷やかしだけではなかったことを知った。JFK では Airline ごとに Terminal が分かれていて、それに合わせて Parking Lot も造られていたから、Highway を降りてそれなりの Parking Lot に行く必要があったからである。

約 1 年数か月ぶりに家内の姿を目にしたのは空港のターミナルビルの窓越しに、到着した機内から地上に降りて来た姿であったと記憶する。到着機がターミナルのすぐそばまで来ているのに、今思うとボーディングブリッジでなくタラップを使い地上に降りて来たのが思えば不思議だが、当時はブリッジの使用が始まってなかったのかもしれない。アンサンブルにハイヒールという言わば正装であった。

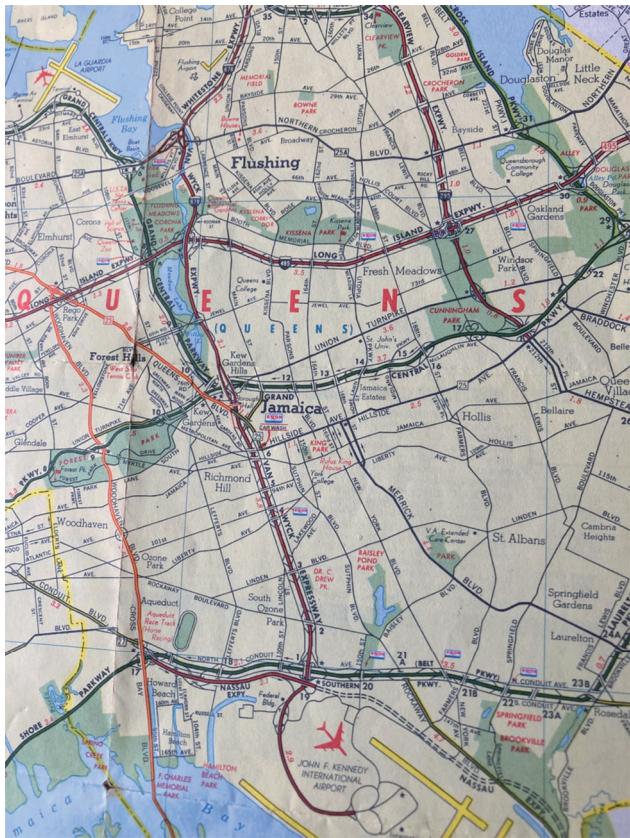
家内にその時の記憶をたどってもらった。

羽田から JAL で出発したが、NY までは飛んでいなくてサンフランシスコで国内線に乗り換えた。で、そこからは正真正銘のアメリカになったと思い、己の英語が通じるかと不安になったが、隣の席の乗客がアジア系の中年女性であったことから気楽に会話出来て、それなりに自信が持てたこと。

空港からアパートまでの車窓から目にした新緑もに萌える景色が素晴らしかったこと。

(地図にあるように、ケネディ空港からアパートのある Fresh Meadows には行くのは Van Wyck Expwy から Long Island Expwy を利用するが、その交差するところが Fresh Meadows-Corona Park<sup>※3</sup> であったから、そこの新緑であったのだろう。地図の中央から少し右上の N 字のある近くにアパートのあった Fresh Meadows がある。)

※3 1964年に“Peace through Understanding”をテーマに開催されたNew York World's Fairの会場となった場所。ちなみにこのFairでIBM360が紹介されている。現在ではテニスのUS Open会場として有名。



EXON Gas Station配布のRoad Map より

アパートに入り、洋服ダンスのように見えた冷蔵庫、流しについていたDisposer、Dish Washer更にダストシート※4を目にして驚いたこと。

旅の疲れをとろうとバスタブに勢いよく湯を張って体を沈めた時、結婚して二人で暮らした日本での生活との大差に思いをはせたこと。

※4 家庭内で出るごみをそこに投入することで、筒を通して地下にあるコンテナに集める設備。

更に生活を始めて、来米直後のことでの記憶にあるものはと家内に質したら、週末に出かけた食料品等の買い物と洗濯であった。買い物は所謂スーパーマーケットに出かけたもので、車で広い駐車場に入り、大きなカートを使って店内の棚から商品を取り込み、レジで精算すると、店員が大きな紙袋に商品を無造作に入れてくれて、その袋が2～3個になるからそれをカートに載せて駐車場の車まで運ぶという、今の日本ではごく当たり前のことであるが、来米前は買い物袋を提げて商店街の店を毎夕刻に回っていたから、自家用車で行き、おおむね一週間分の買い物をする違いを実感したもの。洗濯は先に触れたアパートのあるHousing Complex内の各所に自宅から徒歩圏内で行ける形でアパートのあるビルの半地下になっている所に設置されていたLaundromatで行ったのだが、背丈を超える程の大きさのあった乾燥機から出てきた暑くてふわふわしたバスタオルの感触は今も思い出せると。

1964年暮れに結婚し鎌倉に住んだが、住居は上下で8戸だったろうか二階建ての木造アパートで、結婚したとの知人への挨拶状に「……いわゆるハーモニカ長屋ですが、ならば、二人の間のハーモニーは……」と記したのを覚えている。風呂は付いてなかったから、当時若宮大路にあった銭湯にバスに乗って行っていた。家内とバスの時刻に合わせて銭湯から出て来る時刻を取り決めていたから、思えばそれから何年か後に、南こうせつが「神田川」を歌うが、正にその世界で暮らしていたから、生活環境がNYで一変したのである。